

中国湖南省張谷英村の民家に関する研究

土田 充義・比嘉 健・晴永 知之

(受理 平成8年5月31日)

A study on rural houses in Zhang Gu Ying Cun of Pret. Hu Nan in China

Mitsuyoshi TSUCHIDA, Takeshi HIGA and Tomoyuki HARUNAGA

In the first time, Rural houses of Zhang Gu Ying Cun were built in the late time of the 19th century and the population increased gradually for one hundred years. The style of the living system was completed in this time.

The feature of rural houses is appeared in the orientation to the mountain Long Tou Shan. This was named the main axis by us. The main axis crossed the sub axis in the both sides and the sub axis crossed the little sub axis in one side. The settlement of rural houses is consisted of the main axis, the sub axis, and the little sub axis.

The room size of rural houses is from three meters to eight meters in length and from three meters to four meters in width. The width of the room would be decided by the length of beams hanged in the both walls.

はじめに

昭和60年(1985年)春に湖南大学教授楊慎初先生を訪問し、岳麓書院の建造物について種々ご意見を伺った。その時、通訳をして、更に南岳まで案内して下さった方が莊達民さんであった。莊さんは現在博士後期課程の学生で勉強に励んでいる。この時以来楊教授との学術交流が始まり、平成7年(1995年)8月23日に湖南大学副校長趙立華教授と鹿児島大学工学部長前田明夫教授との間に「湖南大学建築系と鹿児島大学建築学科土田教授との間の共同研究に係わる覚書」を交し、署名された。それは湖南大学と鹿児島大学との学術交流協定に基づく、共同研究であった。その共同研究の内容は次の通りである。

- ①南岳門前町の町家 (1994年合同調査)
- ②張谷英村の民家 (1995年 〃)
- ③永順土家族民家 (1996年 〃)
- ④鳳凰苗族民家 (1997年 〃)

⑤通道侗族民家 (1998年合同調査)

この共同研究期間を5年と決め、翌1999年には「湖南省の民家」と題して日中両文で出版する計画である。

共同研究の開始は調印の日から効力を生じる訳であるから、平成8年8月の合同調査が最初の年になる。つまり平成6年と平成7年の共同研究は個人レベルであった。それが1996年以降は組織として共同研究を開始したことを意味する。これらのことは両者が調印した時を重視することからの表現で、実質的には南岳門前町の町家調査から、中国側では組織として対応していた。それは中心的役割を果たした楊教授の功績と思っている。

平成5年(1994年)に、南岳門前町の町家を実測調査した。その結果を発表し、^{注1}その全体の内容をまだ報告書にまとめていない。後日、湖南大学建築系の成果(南岳自然景観、南岳宗教建築、南岳大廟建築、南岳書院建築)に日本国内の南岳に関する資料を加えて、南岳門前町の町家調査を主体に刊行することになっている。



写真1 張谷英村の当大門と西頭岸の全景

今回張谷英村の民家をまとめることにした。その調査は平成6年7月21日から8月1日までの12日間であった。その成果の一部を日本建築学会で発表した。^{注2} この調査には中国側は柳肅助教授と院生1名と学生1名の計3名、日本側は私以外に院生3名、学生1名の計5名であった。

第1章 張谷英村の成立時期

湖南省岳陽県張谷英村は湖南省でも特異な集住形態を示し、新しい観光地をめざして、店舗や宿泊施設が建ち始めている、平成7年夏の調査の時には自然の景観を損なう程に工事が進んでいた。龍頭山から張谷英村を眺めると、見事な集住形態を捉えることができる(写真1)。

これらの現在の民家群が数代に亘って建てられ、その出発は張谷英氏の第8代目の子孫、張思南氏が万歴年間(1559~1620)に建て始めた時という。^{注3} 万歴年間は40年以上に亘るが、建て始めた初期は恐らく16世紀後半のことであろう。初代の張谷英氏は元朝末から明朝初にかけて活躍した人物で、明朝初に江西からこの岳陽に來たという。その後、第8代の張思南氏まで、岳陽でどのような住居が形成されたか分からないが、現在の張谷英村は、16世紀後半から数代に亘って完成した。したがって、明末から清初にかけて建てられた民家群である。現在の当主は27代目と伝えている。その広さは5万平方メートルで、10箇所(当大門、西頭岸、楓樹屋、東頭岸、王家墩、石大門、上新屋、下新屋、和風墩、潘家沖)が群をなし、合計7000人以上の人が住んでいる。そのうち、当大門、東頭岸、西頭岸、

石大門、王家墩が龍頭山を三方から囲んでいる。私たちが実測した地域は最も中心をなす当大門と西頭岸、それに東頭岸の一部である。当大門は最初に建てられ、その後西頭岸と東頭岸が建てられた。したがって、西頭岸の方が秩序よく立ち、規則性が明確である。東頭岸は崩壊部分が多く、復元困難で確かめられない所が多い。中心となす当大門は16世紀後半、西頭岸は少し遅れて17世紀前期であろう。

第2章 張谷英村の地形と民家群の配列

第1節 地形と民家群

張谷英村は四方を高い山で囲まれた盆地の中にあった。盆地の北西から南東に向かって小山が盆地の中央まで伸びていた。この小山は高さ20mぐらいで龍頭山と呼ばれていた。それは頂度龍の頭のように長い地形をしているからであろう。先端に木はなく、丸い丘で本当に頭のような形だった。この龍頭山の両脇を北西から南東に向かって二筋の小川が流れていて、龍頭山の前方で合流して一筋になっていた。主な住居群は、龍頭山と小川の間に龍頭山を取り巻くように建ち、幾つかは、川を挟んで建っていた。住居群にはそれぞれ名称があり、龍頭山の正面に当大門、東側に東頭岸、西側に西頭岸、石大門、王家墩がお互いに連なって龍頭山の三方を囲っている(図1)。その他に上新屋、楓樹屋、和風墩、潘家沖が点在していた。住居群の周りは一田で、斜面も段々畑になっていた。

また、二筋の川の合流点は、現在では当大門から南東に100mぐらいのところだが、かつては当大門のすぐ前に八の字に二つの橋が掛けられていた。この橋を

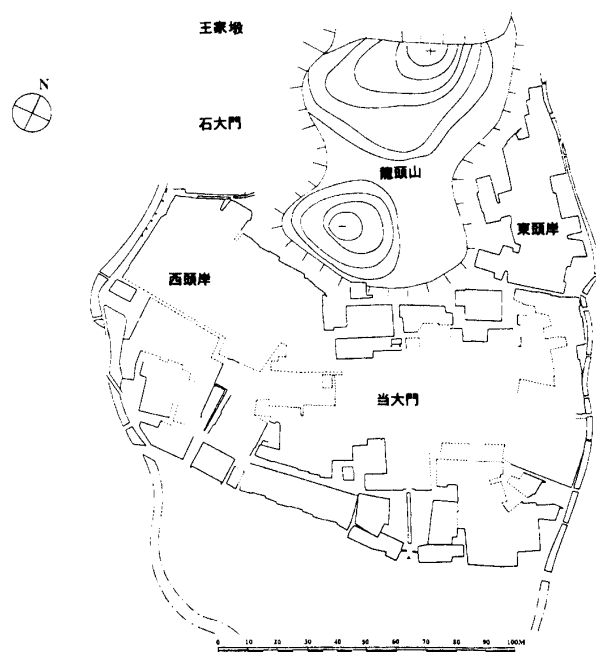


図1 龍頭山を囲む民家群

龍須（＝龍の髭）と呼んでいた。また、現在の川の合流点から少し龍頭山より巨大な天然石があり、龍珠と呼ばれた龍の目玉である（写真2）。そこで、この地形は、龍頭、龍須、龍珠と揃った“巨龍対珠”の形をしていて、風水的に良いらしい。

第2節 川と住居群

川は洗濯や水浴び等、生活に密着しているのと同時に、張谷英村の景観に独特の趣を与えていた。川の両岸は花崗岩が積まれ、岸の浸食を防ぐ護岸で、その護岸に川へ下りる石段が護岸に差し込む形で造られている。二筋の川のうち東側のほうは、住居群に沿って流れていて、各住居に入るために橋が何本も掛けられていた。橋は細長い直方体に切り出した花崗岩を2、3本並べたものが多く見られた（写真3）。西側の川は東側の2、3倍の幅があり、住居群の間をぬって流れていた。西側は川幅が広いせいか、景観もバラエティに富んでいて、下流のほうから、2、3あげると、まず、“百歩三橋”と呼ばれていたところで、ここは川の中を流れに沿うような感じで、三つの橋がジグザグに連なっていた（写真4）。途中に、龍涎井という花崗岩で囲まれた井戸があった。次に、川と住居群の間に沿った歩道があるところで、歩道の上に住居の軒を伸ばして屋根にし、その軒を支えるために木柱が川沿いに連続していた（写真5）。もう一つは、花崗岩で造られたアーチ橋で、そのそばに長寿井と呼ばれる井



写真2 天然巨石、龍珠。奥が当大門と龍頭山



写真3 東頭岸沿いの小川

戸があった（写真6）。この井戸も花崗岩で作られていた。アーチ橋はここでは普通で、ほかに同形のものを2、3カ所で見かけた。

第3節 墓

中国の墓は大切に保存されている。祖先や父母を尊敬し、その造形的表現として、墓がある。それは長年培われた儒教に基づくものであろう。外敵の侵入する位置にある場合が多い。その位置で宮殿や集落を外敵から守るということであろう。したがって、民家群の背面とか奥にあるよりも前面に出てきている。張谷英村でも集落の前方東よりの小高い丘の上にある（写真7）。現在の墓は第14代張が同治7年（1868年）戊辰歳吉に整備し、中央に故始祖張公谷英老大人と記し（写真8）、第2代を向かって右側に、第3代を左側に石碑を立て、更に第4代を第2代の右側に、第5代を第3代の左側に立て、このように交互に中央から離れな



写真4 百歩三橋。向かって左が西頭岸

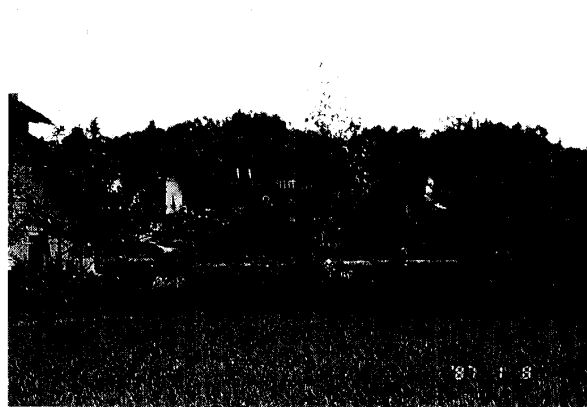


写真7 張家の墓遠景



写真5 西側小川沿いの列柱



写真8 張家の墓近景



写真6 アーチ橋。この右側に長寿井がある。

がら立てる。最後は右側端に第12代、左側端に第13代が祭られている。現当主は第27代で、墓が整備された第14代の時が同治7年（1868年）であるから、この時から現在まで約130年間で13代が家督を継いでおり、平均すると一代約10年で比較的短い。それに対し、第8代の張思南が建設を始めた時期は万暦年間（1557～1620）ということであるから、仮に中間の年代にすると1595年で、それは173年間で7代が継いでおり、平均すると一代が約25年となり標準的な家督相続といえる。私達の実測した当大門は集落の最も中心であり、この当大門から工事が始まったであろうから16世紀末から17世紀初にかけて完成したと考える。

第3章 張谷英村の住居の特性

第1節 構造

煉瓦造壁式構造で、屋根はその両壁体に母屋を渡し、

垂木を架ける。基礎には、細長い花崗岩をひいて地盤が沈下しないように配慮されていた。二階部分は、向かい合う壁の同じ高さの煉瓦を、水平方向に等間隔で抜き、そこに丸太を差しして梁とし、そこに板をひいていた。実に簡単な造りである。だが向かい合った壁に渡す丸太はそれほど長くはできない。そのためスパンを広げることは難しいだろう。

屋根は、切妻造で、堂の部分の棟と寝室等の部分の棟が直行していて、天井（てんせいと呼び、中国独特の明りとりである）の四方に軒が集まるようになっていた。龍頭山の上から見ると、美しい格子状の模様に見える（写真9）。また、堂の部分はスパンが広いので、木柱で支え、木柱は花崗岩の礎盤の上に立っていた。その装飾のつく礎盤は明朝の手法といわれている。^{注4}

開口部は、木枠を煉瓦壁にはめ込んだもので、窓は嵌殺しの格子窓が多く、新しいものに両開き窓が見られた。扉は床より約20cmの高さにあり、枠の内側に穴をあけた木材を上下につけ、そこに戸の後ろにつけた軸棒を入れて回転させる。戸は必ず内側に開き、片開きのものが多かったが、両開きもあった。

第2節 意匠

窓はたいてい格子を付けた嵌殺し窓だったが、なかには透かし彫りがされているものもあった。彫られている模様はいろいろあり、色を塗ったものもあった（写真10）。新しい窓は嵌殺しではなく、3枚の片開きのうち1枚が反対に開く、言い替えると、両開きの窓に1枚片開き窓が付き、この地域では見慣れないものだった。新築の住居ではこの形式の窓は各地に見られる。装飾のつく窓は明朝の手法といわれている。窓に対して戸には意匠的なものは見られなかった。



写真9 龍頭山から見た屋根伏せ

屋根は普通の切妻がほとんどだったが、妻側の左右の壁を持ち上げ波を打っているような妻飾りが見られた（写真11）。これは各地に見られ、中国独特の飾りといえる。

柱の礎は、三層になっていて、一番下が方形、まん中が八角形、一番上が円になっている。この形をよく見かけた（写真12）。

第3節 天井（tianjing／ティエンジン）

中国の伝統的な住居空間の一つであり、この張谷英村でも多数見られた。“総数は全体で206個、大小さまざままで、最大のものは22㎡である”^{注5}。排水として使われている床面は、長方形に切り20～30cm掘り下げ、

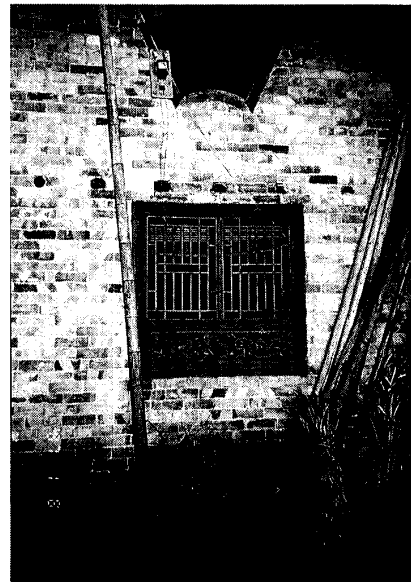


写真10 窓の格子



写真11 西側の小川、石大門あたり

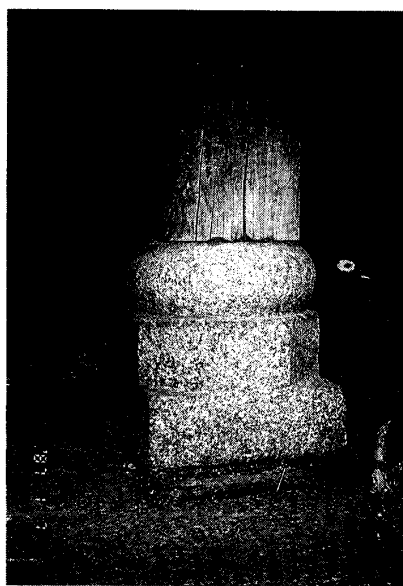


写真12 柱の礎

底と縁を直方体に切り出した花崗岩で作っている(写真13)。同じように、長方形に掘り下げられた中に、床面の高さまでの花崗岩の台をおくもの(写真14)と、二種類あった。また、天井の別の用途である採光と換気のために、屋根はなく、切り取られ、空がぼっかり顔を出していた。周囲の屋根は、天井に向かって縁を形作り、その天井は、いかにも天の井戸であり、その井戸の底を思わせた。

第4節 堂(tang/タン)

天井と連続する空間で、2階分ぐらいの吹き抜けになっており、ホールのような広間であった。左右には煉瓦の壁が二階まで垂直に伸びていて、臥室や廂室の入り口や窓、巷道や他の堂への入り口が煉瓦壁に開かれていた。採光は天井にのみ頼っているため薄暗い。用途は様々で、主に集まって談話をしたり、お茶を飲んだり、竹製の簡単なベッドで昼寝をしたり、居間として使われていたり、各室の入り口が面しているため、通路としても使われていた。また、すべての堂ではなく、堂と天井の連続した空間の一番奥の堂に先祖を祭る部分があり、礼拝堂としても使われていた(写真15)。その他に台所や農作業場などに使われ、堂の用途は多様であった(写真16)。

第5節 臥室(woshi/ウォーシー)

臥室は寢室のことで、主に堂の左右にある。寢室と判断する理由はベッドが置いてあることによる。入り口は堂に面していたり、別の部屋を介していたりした。



写真13 天井の底1

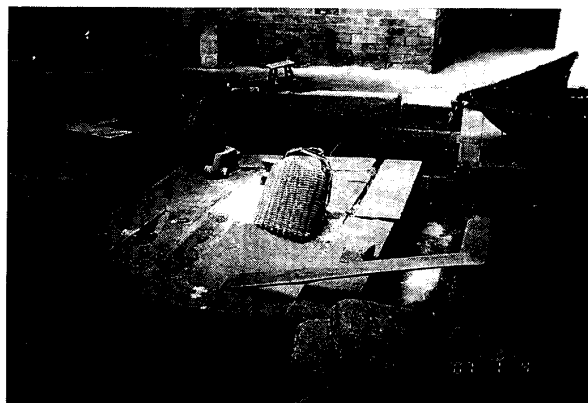


写真14 天井の底2

窓はだいたい1つだけで堂に向いているため、部屋の中は薄暗かった。部屋の幅は3~4mの長方形で、個人の部屋らしく、木製のベッドや机、カラフルな家具、部屋によっては、テレビやラジカセを置いている所もあった。

第6節 廂室(xiang shi/シャンシー)

寢室や厨房以外の個室で、設けられてない場合も多い。広さは臥室とほぼ同じで、食堂として使われたり、道具置き場だったり、家庭によって使われ方はさまざまである。二階に上がる階段を設けている場合もあった。その二階は、倉庫などに使われている。

第7節 厨房(chu fang/ツウファン)

厨房は台所で、かまどのある部屋である。火を使う以外の調理をする場としては、堂や天井を使用していた。現在堂の両脇を台所に使っているが、以前はなかったもので、堂の裏のほうにあった。今では以前臥室や

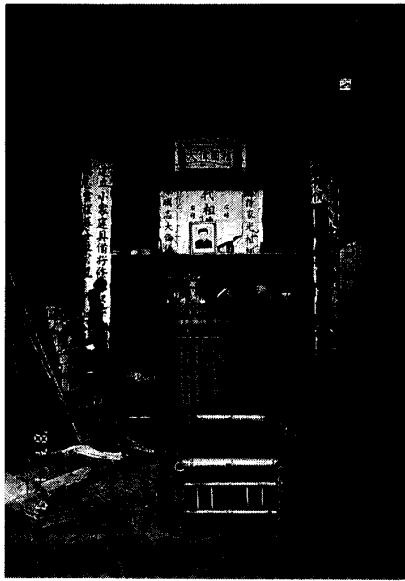


写真15 礼拝の堂

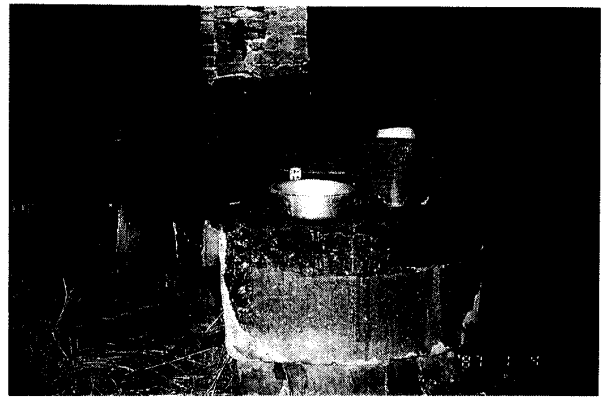


写真17 厨房、使いふるされたかまど

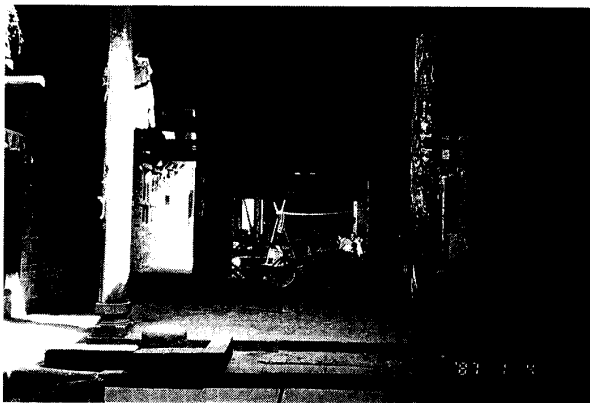


写真16 堂と天井の連続



写真18 奥が豚小屋、手前の板のすき間に用をたす

廂室だった所を、厨房として使っている所もある。かまどは石でできていて、一辺が壁に接し、部屋の中央に雲型に伸びていた。普通、大鍋用が2個と小鍋用が2, 3個付いていた(写真17)。今では、ガスコンロを使っている所もあった。

第8節 猪圈・厕所 (zhujuan・ce suo / チュウジュワン・ツウスウオ)

豚小屋と便所は基本的にセットになっていて、堂の後方において、衛生的に気を付けられていた。豚小屋と便所の境界は、腰の高さの壁でわけられていて、だいたい2, 3匹飼われていた。便所は地面に穴を掘り、板を渡しただけのもので、板のすき間に用を足すよう

になっていた(写真18)。よく豚の放し飼いを見かけるが、この地域では豚を外に出していない。豚を外に出すのは、おそらく、売るときか食べるときであろう。

第9節 巷道 (xiang dao / ジャンダオ)

堂、天井と両側の4室の連なりに対して、平行もしくは垂直に走っている通路で各堂に入る入口があった。幅は約1mの通路で、両側は壁が連続し、一直線に通っている。この通路は屋根まで吹き抜けになっているが、開口は外へ抜けているところだけ、それ以外の開口部がないために光が入るところがない、そのため非常に暗く、トンネルの中を思わせた(写真19)。屋根はここにかけたものではなく、部屋の屋根の軒が

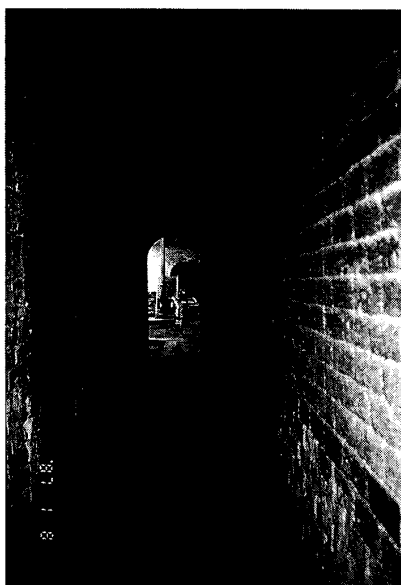


写真19 巷道

延長されたものであった。現在では、堂を通路として使っているので、この空間の重要性は少ないらしく、潰されて部屋にされたり、壊れたままの状態のところもあった。またこの狭い空間は、光が射し込まず、通風がよく涼しいために、長椅子を出して休んでいたり寝ている。

第4章 張谷英村の集住形態

第1節 基本単位

張谷英村は低層の集合住宅で、内部は至る所に抜けて迷路のように混み入っていたが、その平面形態はある基本単位の構成で成り立っていた。基本単位は、一つ天井とその後ろの堂を中心に置き、その両側に2室ずつ、計4室から成っていた。室は長方形で長辺側が天井、堂に面し、縦長に2室連続していた。もしくは、縦につながる2室の間に他の堂や巷道に通じる通路を設けている場合もあった。この基本単位が4個並ぶのが最大で、入口などは例外として、2個の場合もある。いずれにせよこの基本単位をいくつか並べて集住している(図2)。

第2節 主軸と支軸

さらに、基本単位は縦に2個から4個が連なって一つのまとまりを作っていた。この連なりで、天井から堂のほうを見て、その先に龍頭山があるのを主軸と呼び、主軸に対して垂直な軸を支軸と呼ぶ。主軸を起点に支軸が左右に広がっていた。また、主軸、支軸の一

番奥の堂、つまり主軸の龍頭山側、支軸の主軸側ではない端に、祖先を奉る部分があり、その堂は礼拝堂として使われていた。主軸は4個(基本単位4個の意味)を必ず並べ、支軸の多くは3個を並べ、更にその支軸に直行する孫支軸というべき支軸には2個並んでいる。これらの主軸、支軸、孫支軸から基本単位の集合個数を調べると、そこには長さの関係から当然だとしても秩序が見られる。建設時期は主軸がまず造られ、次に支軸が建てられたであろう。

第3節 集住

張谷英村の集住形態は、基本単位が連なった主軸や支軸の配列で決められている。このことをまず指摘できる。次にその主軸は龍頭山に向かう方向を有しているということである。つまり自然の地形によって集住形態が規定されているといえる。更に両端の二筋の小川が流れ、内側に集住している。自然を視野に入れた集住形態といえる。

第5章 堂、臥室の空間構成

第1節 平面構成

張谷英村における民家群の集住形態を解明する基本に主軸、支軸、孫支軸の構成から成っていることを述べた。その主軸には基本単位が4個、支軸には3個、孫支軸には2個ある(図2、図3)ことも述べた。この基本単位について、何故基本単位と決めたか、その過程について述べておきたい。最初に龍頭山に向かって南を正面とする主軸が設定され、その主軸に従って住居が建てられていたが、どれが基本単位かをすぐには決めえなかった。しかし支軸の民家群の方を調べると、両側への通路で各住居が分断されていることが分かる。それゆえ1分断部分(図2、図3の斜線部分)を1基本単位とみなすことが分かる。その構成は両側に2部屋ずつ計4個、中央に堂と天井を置く、これが1基本単位である。この堂と天井が交互に並ぶ。その並び方は堂、天井、堂の順である。入ればすぐに広間の堂がある。それは当然なことであろう。居住に入るに最初に天井があるのは確におかしい。しかし入ってすぐに光が射し込む天井があれば、明るいいし、外の明るさから急に暗いところに入るよりも気持ちがよい。そのために主軸の入口は堂が小さく、天井がすぐ近くにある。しかも小さい。小さくとも光を取り入れるには十分であった。この堂を別にして、天井、堂の順である。

基本単位の4部屋は3部屋が臥室(寝室)、1部屋

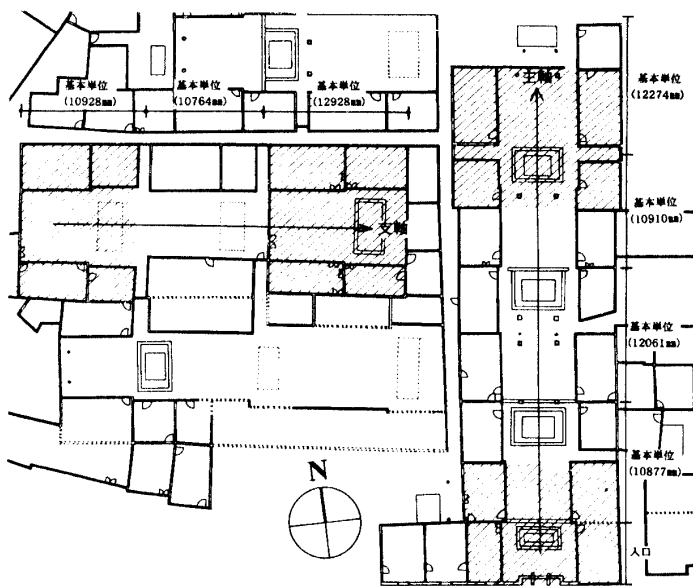


図2 主軸と支軸における基準単位

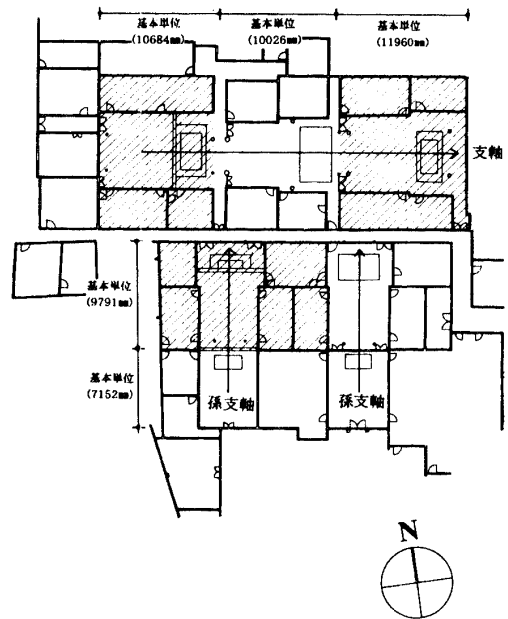


図3 支軸と孫軸における基準単位

が食堂、物置、時には厨房などの多目的に使われている。1家族に寝室を3個必要とするのは夫婦、男の子供達、女の子供達に使うからであろう。天井、堂を挟んで家族の寝室が並び、昼間は堂や天井を生活の場としている。

寝室の大きさを内法寸法で実測すると長手方向（長辺）3000mmから8000mmまでのバラツキがあるが、梁間方向（短辺）は大部分が3000mmから4000mmのあいだに入ることが分かる（図4）。両端煉瓦で、それに梁を渡して、2階にしたり、屋根を架けたりする。室内に柱を建てないために、梁間に制約を加えないと梁が中央で折れる。そのために3.5メートル前後の長さにせざるえなかった。それゆえ部屋の大きさはだいたい、6尺3寸の畳を敷いたら4.8畳、約5畳になり、日本と比較して決して広いとはいえない。それに対し堂の梁間は1.7倍から2倍近い。そのために柱を2本立てて梁を支える。それでも堂の所の梁間を狭くするために天井よりも幅が狭い。従って、設計にあたって第1は基本単位を連続させる、第2に梁間寸法を基準にしていたことである。梁間寸法を基準にした根底には梁の丸太を長くできないことからの制約を指摘することができる。

第2節 立面構成

主軸、支軸、孫軸に方向がある。主軸は龍頭山に向ける、支軸は主軸に向ける、孫軸は支軸に向けて、それぞれに整然とした秩序を読み取ることができる。そ

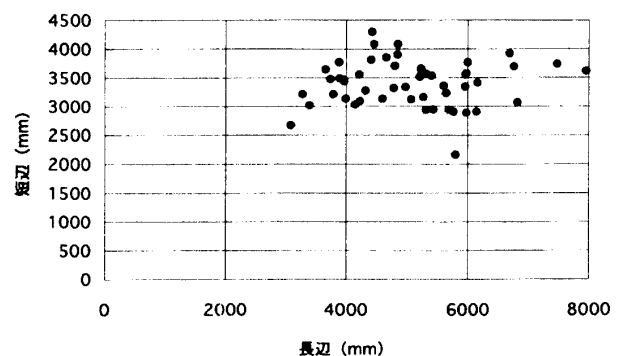


図4 臥室の大きさ

れらの立面構成においても、奥へ進むにしたがって棟を高くしていることが分かる（図5）。最も奥に祖先を祭る厨子を安置する。日本と同様に位牌が内に納められていた。

もう1つの特徴として天井^{てんじょう}を張らないために上昇する空間、上方へのびのびと広がる空間を維持していることである。狭い臥室（寝室）と広々とした堂それは開放的な堂と閉鎖的な室の結合といえる。この堂と室との空間構成は中国古代から使われ、現在でもそれを継承しているといえる。しかし基本単位を分割して堂と室に分けることができるにしても、生活空間として分けることができない。やはり堂1つ、天井1つ、部屋4つ、それらが一体となって基本単位となり、それらをどう接続させるかが重要であったし、この接続

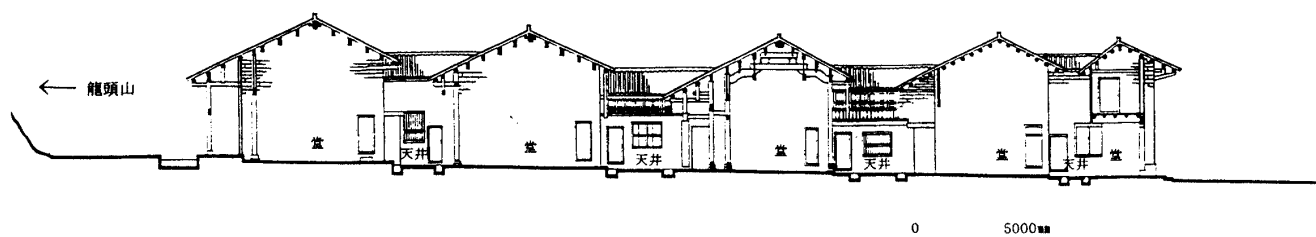


図5 主軸の断面図(湖南大学作成)

の仕方によって集住形態が決まるといえる。

次に天井と堂について述べると、共に垂直方向、つまり天への軸線を持っているということである。天井はそのまま天とつながっているし、堂は棟まで広がり、それは天まで通じる。堂は天井と接するが故に垂直方向を一層高めているといえる。

空間構成をまとめると横への広がりはなく、祖先を祭る厨子へ向かう縦軸と、天へ向かう垂直軸とで構成されているということである。と同時に横への広がりのない梁間(スパン)が実は設計にあたって重要であることを指摘した。

この共同研究にあたって楊慎初教授、柳肅助教授には大変お世話になった。調査中、住民の方々の調査に対する不信感を取り除いて下さったり、また断面図の実測を手分けして実施して下さいなどあげればきりが無い。また湖南大学の院生李文君、学生戴菲さんに協力していただいた。ここに記して感謝の意を表すしだいである。

注1・島尾拓也, 土田充義, 楊村 固, 小山田善次郎, 本田健吾, 晴永知之, 高藤 誠:「湖南省南岳門前門町とその町屋に関する研究」日本建築学会九州支部研究報告 第35号 1995年3月

注2・比嘉 健, 島尾拓也, 晴永知之, 高藤 誠, 土田充義:「中国湖南省張谷英村の農民住居とその集住に関する研究(アジア文化圏の民家と集住形態に関する研究 3)」日本建築学会中国・九州支部研究報告 第10号 1996年3月

・島尾拓也, 土田充義, 晴永知之, 高藤 誠, 比嘉 健:「南岳の町屋と張谷英村の住居(アジア文化圏の民家と集住形態に関する研究 4)」日本建築学会中国・九州支部研究報告 第10号 1996年3月

注3・楊慎初主編 湖南伝統建築 (p. P 269) 湖南教育出版社 1993年8月

注4・以前詳しく調査した柳助教授(湖南大学)はこの種の礎石、礎盤は明朝の手法であると指摘していた。

注5・張谷英村簡之一, 二, 三 張飛儒 張谷英村で入手した資料